

月刊

# 地域保健

2  
2011

●特集

対人援助技術を磨く

●FRONT RUNNER  
高岡市福祉保健部健康増進課課長補佐  
伊原哲子さん

●OPINION!  
元全国高等学校長会会長  
小林一弘さん

●保健師さんへ



# 伊原哲子さん

●高岡市福祉保健部健康増進課課長補佐



保健師の仕事が自分をも人間的にも成長させてくれた。

これから必要なのはカリスマよりも皆で支え合う体制です。

今月のFRONT RUNNERには富山県は高岡市の保健師、伊原哲子さんにご登場いただく。

両市の歴史は古い。奈良時代には、  
として赴任した大伴家持がこの地で多くの秀歌を残し、「万葉の里」として知られることとなった。町が開かれたのは1609年、加賀藩二代藩主の前田利長公が高岡城を築いたことに始まる。2009年は開町400年にあたり、前田利長公入城大行進などさまざまなイベントが開かれた。

◎

伊原さんは高岡市の北隣にある氷見市の出身。「これからの時代は女性も資格を持ったほうがいい」と考える父親の影響を受け、富山赤十字高等看護学院へと進んだ。

「高校生のころは特に看護に関心はなかったのですが、母が高岡市内の済生会病院に入院してしまい、家族の看病

をするうちに興味も出てきました。看護学校時代は授業が終わると富山市から母の入院する高岡市の病院に直行、再び寮のある富山市まで戻るという生活でした。「伊原さんは手術場とかICUに向いているね」と言われていたのですが、私自身はあまり体が丈夫でなく熱を出してはよく休んでいましたし、父もそんな私を心配して、「看護師ではなく夜勤がない保健師がいいだろう」と言っていました。それで看護学校を卒業後、富山県立総合衛生学院の保健学科へと進んだのです」

保健学科を卒業した1975年、高岡市に就職。当時は国保保健師であり、レセプトのチェック、多受診者への訪問指導、乳児の3か月児健診、結核検診などに携わった。月の半分は家庭訪問に充てることができた恵まれた時代で、住民とは深くかわることができた。当時の保健師の多くがそうである



ように、伊原さんもまた「私は住民に育てられた」と感じている。

「就職当初は丁寧な言葉遣いだったのですが、訪問先では「ここですつと仕事する気なら、そんなおくしい(ききれい)を意味する方言)言葉を使ったら駄目。高岡弁使わない」と言われました。また、いきなり保健指導に入

「保健師の対人援助力が弱くなった」と危ぶむ声がある。個人支援は集団・地域を対象とした活動の基盤ともなり、その力の衰えはそのまま保健師の力量低下につながる。かつての保健師は豊富な経験により対人援助技術を培ってきたが、昨今は業務量増大による訪問数の減少など、若い保健師たちを中心に対人援助技術向上の機会が失われつつある。こうした状況下においては、「場数をこなす」体制づくりとともに一つの経験から深く学ぶ術を身につけることが求められる。

今月の特集では、総論としてクライアント―支援者という相互作用の構図における、支援者の立ち位置と視点の置き方について整理するとともに、現場および保健師教育の立場から、対人援助技術習得の実践についてまとめた。

**P18** いま、なぜ対人援助技術なのか

◎奥川幸子（対人援助職トレーナー）

**P35** 対人援助職として「使える保健師」になるために

◎星野真由美（小平市健康福祉部）

**P40** 保健師基礎教育の立場から

◎矢庭さゆり（新見公立短期大学）

# 対人援助技術を磨く

# 入職3年目、 口蹄疫問題を 乗り切った自信

皆に信頼されるオールマイティーの保健師を目指して

さかちと まいこ  
坂本麻衣子さん

●宮崎県川南町健康福祉課



▲川南町を一望する絶景の地、峠の里にて。春には茶畑がまぶしい緑となる



取材・文・写真／西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）



▲幼稚園のころの坂本さん

将来の仕事を決めるきっかけは世界中に落ちていた。宮崎県川南町に入職して3年が過ぎようとしている坂本麻衣子さん（27歳）の場合、小学6年生のとき目の当たりにした風景がポイントになっていた。

「当時住んでいた町（佐土原町）現宮崎市の青少年国際交流として訪れたマレーシアで、水上生活者の多い地域に行きました。とても貧しく、医者にもなかなか、かかれぬ。一番近い

病院まで2時間もかかるという聞き、日本との違いに衝撃を受けたのです。同時に、こんな海外で活躍している看護師さんもいると聞き、自分も海外で医療を支援するスタッフになりたい！看護師を目指そう！と思ったのです」

母親がたまごの旅行引率ですることになり、ついでに参加するようになったというから、きっかけというのは面白い。さらに話を聞いていくと、坂本さんが看護師を意識したのは周囲の環境も影響していたようだ。

「父が公務員です。同僚に保健師さんもいて家族ぐるみのお付き合いがあります。母は現在ケアマネージャーです。看護師の叔母もいま

## つらかった二浪生活

一度看護師を目指そうと決めたら押れることはなかった。小学校で水泳、中学校で剣道に汗を流しながら高校受験に臨んだ。進学先は「早く看護師になるための勉強がしたい」と、看護に結びつく学校も考えていたようだ。しかし両親の「保健師の資格を取れるのだから大学に行ってほしい。そのためには普通科高校へ」との希望が強く、地元の特立高校に進学。  
大学受験に際し、坂本さんが考えていたのは県外の看護系国立大学だ。「私も親も、一度は県外に出てみるべきと意見が一致していたのです」ところが……  
サクラは微笑むことはなく、浪人することになってしまった。「仕方がない、来年頑張ろう！」と坂本さんは卒